エスカルゴの歌

團　伊玖磨

朝日新聞社

エスカルコの歌

團　伊玖磨

朝日新聞社

團（だん）　伊玖磨（いくま）
大正13年4月7日東京生れ。昭和20年東京音楽学校（芸大）作曲科卒業。以後作曲ならびに自作の演奏に従事。昭和41年日本芸術院賞受賞。「パイプのけむり」「続パイプのけむり」で第19回読売文学賞（随筆・紀行）受賞。
作品　歌劇「夕鶴」「ききみみずきん」「楊貴妃」他，交響曲5曲他，歌曲，劇音楽等作品多し。
著書　「朝の国・夜の国」「不心得12楽章」「パイプのけむり」「続パイプのけむり」「続々パイプのけむり」「かんゲぁせいしょん・たいむ」「又・パイプのけむり」「又々・パイプのけむり」「九つの空」「まだ・パイプのけむり」。

エスカルゴの歌

昭和47年12月15日　第1刷発行

定価　580円

著者　團　伊玖磨
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　東京 大阪 名古屋 北九州　朝日新聞社

Printed in Japan　0095-254060-0042
© 1972 IKUMA DAN

まえがき

昔の本が再刻されて世に出る事になった。中の文を読み返してみると、若い――と思う。今更ながら、これらの文を書いていた頃から十数年が経った事をしみじみと考えさせられてしまう。若い――という事は難しい事だと思う。若いが故の不完全さ、拙さがある一方、若いが故の、今では表現する事の出来ない眩しいものもあるからである。そんな事を考えて、若さとは難しいものだと多少逃げた表現をしながら、僕はバーナード・ショーの、若さというものは、若い奴等が持つには勿体ないものだという言葉を思い出す。

再刻に当たって、内容に手を入れるか入れないかを僕は随分迷った。例えば「横須賀線」は、その文を書いた時から、又々何度もダイヤ、車輛の繋ぎ方にも変更があったし、もっとこまかく言えば、十年前の文に、三年前とあるのは、十三年前と、今を規準に書き改める可きかどうかという疑問も起きた。然し、これらの改訂を僕は一切しない事に決めた。当たり前の事かも知れないが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

書き改め出したら、要するに、全部が全部を書き改めなければ気が済まなくなり、そんな事をすれば、「エスカルゴの歌」は「エスカルゴの歌」ではなくなってしまうからに他ならない。現在が現在であるように、過去は過去であり、然し、過去というものが、現在の頭脳で認識されるものである以上、過去は過去であると同時に現在の一部を成しているに決まっているからでもある。

前の版では、前半の、三浦半島での生活を主とした十四編を「湘南博物詩」、後半の、音楽家としての生活の周圍を書いた十三編を「五線のうちそと」として纏めてあったが、そのような枠は今度取り去る事にした。寧ろそんな事よりも、この二十七編の文は、その後から始めて現在も書き続けている随筆「パイプのけむり」の前奏曲（プレリュード）として読んでいただければ、と、今の僕は思うからである。

一九七二年　秋

八丈島樫立の書斎で

團　伊玖磨

エスカルゴの歌・目次

まえがき 1
うみがめ 9
龍舌蘭 19
エスカルゴ 26
石鯛釣り 37
犬 44
あさがおがい 52
山菜と野草 60
鯛 66
のすり 72
タイド・プール 80
むじな 89
のり 99
大洞窟 106
横須賀線 123

売韻業 135
蛇交記 143
デ・ラックス 150
パッション・ジュース 157
伝書鳩 166
アンディーヴ 173
動物園 179
アーティチョーク 186
羊 191
肌 198
ホワイト・クリスマス 208
ロンドンのうなぎ 218
鼓手の思い出 230
初版あとがき 245

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

うみがめ

三年前、夏のある朝、うちの前の海岸を歩いていた僕は、小さなうみがめの子を拾った。どこから流れて来たのかと訝りながら手にとってみたその小さな甲羅には、何かがあけた鋭い傷穴があって、掌に載るほど小さなその子がめはすでに死んでいた。うちに持って帰って標本にしてよく観察すると、この生まれて間もないかめは、あかうみがめの子と知れた。このへんの海にいるかめは、あかうみがめとあおうみがめが主であって、あかうみがめの方がいささか頭でっかちの形をしている。そのかめの子は、生まれていくばくもなく死んだものらしく、まだ手足の肉も生時とあまり変わらぬそのありさまから推して、死んでから間もないことも判った。コクトーを真似て耳に当ててみたわけではないけれど

も、掌に載せた小さな甲羅からは、何か、そこはかとない音のようなものが僕の心に伝わって来る気がした。わだつみ、八潮路、いろこの宮、そのような沢山のことばが、その音のようなものに包まれて立ち昇って来る気もした。

数日して、また、同じところの波打ち際で、今度は、生きているのを拾った。このときの驚きは大きかった。なぜなら、ここに生きたあかうみがめの子が歩いているとすると、この前拾ったのも、遠くから流れて来たのではなくて、この浜で孵化した兄弟分ではないかと、いや、たしかにそうだということになるからである。そういうことになれば、この、いつも僕が釣りをしたり、貝を拾ったりしている小さな浜のどこかに、大きなうみがめが上陸して産卵をしていることになり、これは思うだに楽しいことにちがいない。

うみがめは、夜、砂浜に上陸して自分で穴を掘り、その中に卵を産んで、もと通りに砂をかけて置く。卵は太陽の熱で自然に孵化して、生まれ出た子がめは、すでにその瞬間から自力で海へ帰って行く。卵を食用にする小笠原諸島などでは、土民は、親がめが砂浜に上がって来たときに自分の重い甲羅を引きずって歩いた砂の上の跡をつけて、簡単に卵が埋めてあるところを見付けるのだということを前に読んだことがあった。そこで、注意しながら、僕は、さして広くもない、この、うちの前の三ヶ浜と名付けられた浜辺のどこかに、うみがめの卵の埋まっているところがないかと探しまわったけれども、もう孵化してしまったあとなのか、それは見付からず、従って、このあかうみがめの子がここの浜辺で孵化したのかどうかはついに判らなかった。

拾った子がめは、飼おうと思って、うちの水槽に入れて、海水を張り、一晩、倦かずに眺めたけれども、何を餌に与えてよいかも判らないし、可哀そうな気がしてきて、海へ戻してやろうと思った。

翌日の朝、子がめを大事そうに持った僕と、四つになるうちの男の子は、海岸に降りて行った。

「可哀そうだから放そうね、紀ちゃん」

「うん、うらしまみたいだね」

ぎくりとした。子供にいわれるまで、昔々浦島さんという人がいて、今日の僕はその人と同じことをしているのだということは全く気が付いていなかったのである。僕は、気が付くまで無意識であっただけに、子供にいわれてはっとしてからは、自分の今していることが、祖先の心に繋がっているような一種の喜びを感じる一方、誰かが僕達を見ていて、あのおやじは、無理にかめなどをどこやらから摑まえて来て、仔細らしく、可哀そうがるような顔をして、海辺で放し、あわよくば、再び迎えのかめの背に乗って、海底不夜城の美人群に逢いたいと心秘かに念じているのではあるまいかと思われるのではないかと、妙なことを考えて一人照れた。

放たれたかめは、それが本能のさだめであるかのように、沖に向って一所懸命に泳いで行った。そして、やがて水に潜って見えなくなった。あとには、静かな朝の相模湾がひろがっていて、子供と僕が手をつないで立ってそれを見ているだけであった。

「帰ろう」

朝の浜辺の砂は、僕達の、大小二つのサンダルのあしあとを長くつけて、ところどころ、その長く続いたあしあとの一部を、澄んだ波が打ち寄せては消していた。

「うらしまのうた、教えてあげようか？」

「うん」

昔々浦島は、
助けたかめに連れられて、
龍宮城へ来てみれば、
絵にもかけない美しさ。

「僕、そのうた知ってるよ」

「じゃ、一緒にうたってごらん」

乙姫様の御馳走に、
鯛（たい）や比目魚（ひらめ）の舞踊（まいおどり）
ただ珍しく面白く、
月日のたつのも夢の中（うち）。

「いいね、面白いね」
「そうだね、いいうただね」

遊びにあきて気がついて、
お暇乞もそこそこに、
帰る途中の楽は、
土産に貰った玉手箱。

「そこそこってなあに？」
「急いで、あわててっていう意味だよ。さてこの次がちょっと凄くていいんだぜ」
「そう？」

帰って見ればこは如何に、
元居た家も村も無く、
路に行きあう人々は、
顔も知らない者ばかり。

何だか僕はちょっと悲しくなって来て、ほのあたたかい子供の手を引きながら、すぐ続きを歌ってもっと悲しくなった。

心細さに蓋とれば、
あけて悔しや玉手箱、
中からぱっと白烟、
たちまち太郎はお爺さん。

ようやく、浜からの石段をのぼって、道に出た僕達は、もう一度、高くなっている道から海を見下ろした。

「きれいだね、パパ、かめのおうちは遠いの？」

悲しい顔を見られたくなかった僕は、いつまでも子供の手を握ったまま、遠い海の青さを見ていた。

忙しい暮らしの中に一年が経ち、また、夏が来ていた。ある夜更け、僕はうちの下の砂浜にじっと坐っていた。ここは、僕のうちから南向きの斜面をだらだら下りて来て、道路をわたり、よく子供の手をとりながら浜に出るときに通る石段の下から約五十メートルほど御用邸の方に寄った砂の上で、海に向って左の方は、御用邸までそのまま砂浜が続き、右

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com